

前の詩集「情況と感傷」から四年になった。その四年間の作品を一具全部並べてから十冊ほどはすした。逆に二十代の古い作品を挿入したのだからへんな心理である。

新しいものにも古いものにもこんど手を加えたところがある。

そして、手を加えたいのだがうまくいかず、かといってはずしたくもないのが、小部分は発表したことのある小片シリーズだ。これは発表した分には「期不同・私の大阪地図」と題をつけたが、実は「関西手帳」と地域性を広げた題で書きためてあり、この一冊のなかに少し席を與えたいつもりがあった。だが十冊ほどはずしたというのとは別にどうも気がつきっぱりしない。で、ともかく例外としたがまだ未練がある。以下、優柔不断の見本になってしまいが、後記のスペースを少しひろげて小片シリーズのいくつかを提出させてもらう。後記代りにしておかしくない側面もあると強弁して。

期不同・私の関西手帳抄

近くで音楽のようなものが鳴っている。

市立芸大音楽部境内に武器殿は編入されている。

しめきられた戸の隙き間からのぞくと

床板は広くにぶく光っていた。

あのどこかで竹刀を構えたおやじが倒れた。と思った。

(京都平安神宮西)

ついてきたからめしをやっていた仔犬が

タルマにはねられて死んだ。

屍を米軍キャンプ跡の草っ原へ抱いて埋めた。

空襲残骸の西洋船が一つだけ東にあって

まだ崩れない二階に煙燭の火がゆれていた。

(神戸イーストキャンプ跡)

——にいちちゃん フタの韻やないのう。

せまあい眞湯で刺青のある老人に言われた。

湯上り 海はおわぬがどこか「漁村」の路地を歩いた。
戸袋に津喰絵を飾ったあけっ放しの家で
さっきの老人がビールを飲んでいた。

(阪神西大阪線福駅用)

海があった のだから波も あつたに相違ない風も。

けれど

海がかすかでないようにかすかに

椅子とたばこのけむりがある

歳月の底から浮びあがってくる何かが足りない。

(赤羽御崎)

暮坂峠 篠口峠 佛坂峠 逢坂峠

明月峠 坂井峠 浮峠

こんなにも峠があつて峠は山に囲まれていることをいま
地図でたしかめたが、たにしをバケツ一杯掘った早春の

田んぼほどのあたりか。直後、俄雪に巻かれた。

(大阪府豊能郡能勢町)

少年のおれが見た注連二度の車窓の朝顔。

精い山やボブラ 霜みたいな刈 カササ子など

その程度のしかも一九四一年夏の梅過を

故郷への思いをこめて聴く夫婦は九州生れ在日二世同士。

出してくれた酒のへらしようもなく。

(八尾市安中町)

おんなへの出発の特異な途をして

しかし決して説かなかった女と五年後にすれちがった。

女がぐぐってきた線路下の道をおれは見ていた。

おれのうしろの何を女は見えていたか。

寂れてはいないらしかった。

(地下鉄動物園前)

公園のなかにその植場はあつた。

ピンハネ專業の最低飯場だった。

近くの警察で教わって家出息子探しの母親が時々きた。夕方 仕事帰りのおれたちの一杯とめしの頃合いにきて愚図ついている母親には誰も同情しなかった。

(中津大ガード付近)

本州北廻 十三編ではうまい蛸がとれる。

淀川べりのこのまちでは小柄な詩人が

津軽よりもさびしい時をすこしぬくめて書いている。

用で蛸はとれないだろう。

夜はきらきらにネオンの高低がある。

(淀川区十三)

田んぼにちいさな水車が廻り食用蛙が鳴いていた。

幸福町に幸福市場があり幸福温泉があった。

小学校新築工事は完了した。

工事と無関係な理由で元請では社長が逮捕された。

下請で土佐出身の土工親方が換路生れの女房と別れた。
(京阪古川橋駅北)

朝は去って

その日第一食は熱りがちにカレーライスを食べた。

業地いっぱい陽があたっていた。

コーヒーもんだ。

——高速道路が墓地を削り隔ちりを悪くしてしまった。

(阿倍野斎場付近)

この「関西手帳」はまだまだあるが要するにごらんの通りのメモにすぎない。それが本文への組みこみをきつぱりきめさせなかったのだろう。だが本文に並べたものだって果してメモからぬけ出ているかどうか。ごらんの通りともう一度書いておく。

今回も引きつづいてVAN書房をわずらわし、小島輝正さんから謝をいただいた。深謝。(82年2月7日)